令和６年度　東国文化自由研究

瓜二つの古墳の謎

～総社二子山古墳と綿貫観音山古墳～

群馬県立中央中等教育学校

1年1組　平岡莉奈

1. 調査のきっかけ

高崎市に住む私にとって綿貫観音山古墳は、幼稚園や小学校の遠足で行った時に、墳丘で遊んだり石室を覗いたりした思い出のある、とても身近な存在だ。また、群馬の森へ家族で遊びに行った時には、度々群馬県立歴史博物館に立ち寄り、綿貫観音山古墳から出土した埴輪や豪華な副葬品を見たことが、古墳時代に興味を持つきっかけにもなった。

ある日、地元の大類公民館の高井郁朗館長さんから、綿貫観音山古墳と総社二子山古墳は同じ大きさと形だということを聞き、2つの古墳とその関係について非常に興味を持った。そこで、2つの古墳について詳しく調査しようと思った。

2. 調査方法

それぞれの古墳の現地調査や、博物館や資料館を訪問し、文献資料などを調べ、2つの古墳の共通点と関係性を探る。

① 古墳の現地調査、出土品等の調査

総社二子山古墳、綿貫観音山古墳で現地調査を行う。群馬県立歴史博物館、前橋市立総社歴史資料館を訪ね、副葬品や古墳にまつわる背景などを調べる。

② 聞き取り調査

現地調査で疑問に思ったことを専門家に聞き取り調査する。

③ 図書館・インターネット等の文献調査

更に詳しく調べたい点について、書籍や資料で調べる。

3. 調査結果

(1)2つの古墳の概要

綿貫観音山古墳

所在地　高崎市綿貫町 1752

時期　6世紀後半

形状　前方後円墳

規模　墳丘全長 約 97m

後円部径 61m

前方部幅 63.2m

石室　横穴式石室(両袖型)

石室全長 12.6m

玄室長 8.1m

角閃石安山岩削石積石室

副葬品

鏡:中国―神獣帯鏡―二神六獣鏡

玉類:ガラス丸玉・ガラス小玉 53・金製中空丸玉 31

耳飾類:金環 9・銀環 4
その他装身具:金銅製鈴付大帯・金銅製ボタン形飾り 125
鏃刀:金銅製頭椎 1・鉄地銀張素環捩環頭大刀 1・三累環頭大刀 1・刀身 2
鉄鏃:鉄鏃身石突 11
衝角付冑:変形冑
その他武具:挂甲 2・臑当 1・籠手 1・胸当
工具:鑿 3・鉄鑷子 1・鉈 1・銀装刀子 9・鹿角把刀子 7
馬具:金銅装花弁付雲珠 4・金銅心葉形杏葉 3・鉄地金銅張鞍金具 1・他 113
土師器:坩・器台
須恵器:甕・蓋杯(TK43)・はそう・提瓶・台付

昭和 43 年に発掘調査が行われ、未盗掘だった横穴式石室からは、豊富な副葬品が出土した。その中には、中国大陸・朝鮮半島とのつながりが深いものが多数ある。これらの副葬品から、この地で活動していた有力な首長だった被葬者の経済力や社会的地位、対外交渉の一部を知ることができる。

総社二子山古墳

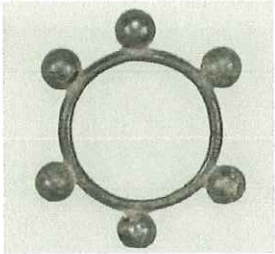
所在地　前橋市総社町植野 368
時期　6世紀後半
形状　前方後円墳
規模　墳丘全長 約 90m
後円部径 45m
前方部幅 61m
石室　横穴式石室(両袖型)
後円部石室
石室全長 9.4m(残存値)、玄室長 6.8m
角閃石安山岩削石積石室
前方部石室
石室全長 8.7m、玄室長 4.2m
輝石安山岩自然石乱石積石室
副葬品 (前方部石室)
玉類:メノウ勾玉 4 (東京国立博物館所蔵)
釧:鈴釧 1 (六鈴)
耳飾類:金環 1・銀環 1
鉄刀:頭椎大刀 1・直刀

須恵器台付直口壺 (東京国立博物館)
image:TNN image Archives

鉄鏃・長頸鏃：2

工具：刀子 2

須恵器：脚付長頸坩 1・瓶 1・提瓶 1・はそう 1・高杯 3・その他



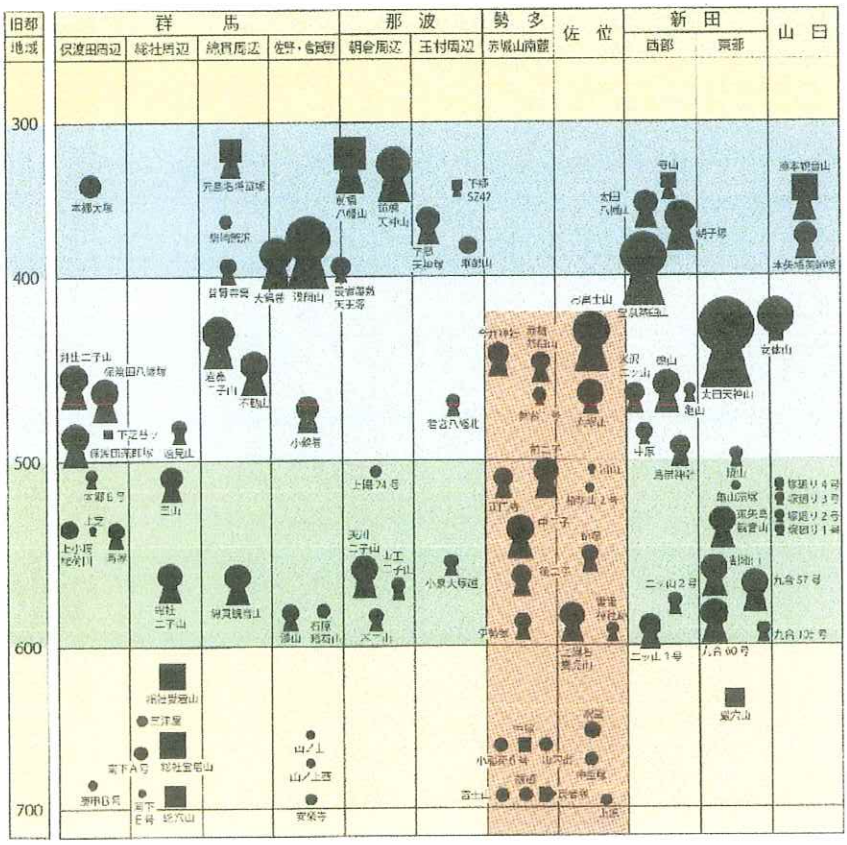
六鈴釧（東京国立博物館）
image:TNN image Archives

総社古墳群の分布

総社古墳群の移り変わりと主なできごと　『東国の雄　総社古墳群』より

5世紀後半から7世紀後半にかけて築かれた地方の首長層の墳墓である総社古墳群の1つであり、古代国家体制成立までの過程を見ることができる。文政2年に前方部石室が開口され、後円部石室の開口はこれに先立つと考えられる。

その大きさは、綿貫観音山古墳に匹敵し、同時期の古墳の中でも最大規模の1つである。これは、埋葬者が上毛野地域で主導的な役割を果たしていたということが分かる。



群馬県中央部の古墳変遷図

（雄山閣　全国古墳編年集成より）

『榛名山東南麓の古墳』より

⑵全く同じ？古墳の形と大きさの謎

2つの古墳の過去のデータを比較した際に、古墳の大きさや形が同じとは言い切れないことに気づいた。更に調べると、総社古墳群について新たな調査が最近行われていたことを知った。そこで、前橋市教育委員会文化財保護課の福田貫之さんに実際に会い、総社二子山古墳に関する調査内容を中心に、お話を伺うことができた。

総社古墳群範囲内容確認調査

平成29年から令和2年にかけて、前橋市が中心となって「総社古墳群範囲内容確認調査」が実施され、総社古墳群（遠見山古墳、王山古墳、総社二子山古墳、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳）の古墳の形・大きさや古墳としての範囲などについて調査が行われた。

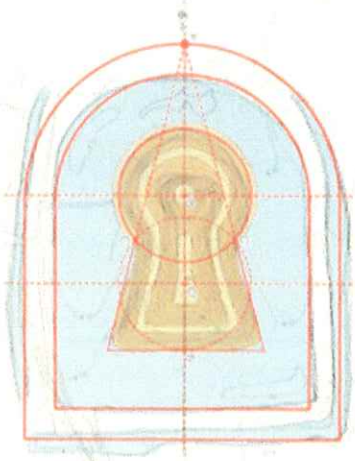
総社二子山古墳兆域復元図

『総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅱ』

総社二子山古墳については、令和2年に調査が実施された。国指定史跡に登録されているので、墳丘の調査が難しいため、古墳の堀についてトレンチという発掘方法で調査をした。トレンチは幅4m～2m掘って調べる試堀調査のことを言い、主に地質調査で使われる。この調査をしたことによって、古墳の西側で南北方向の堀が見つかり、前方後円墳の周堀の立ち上がりを初めて掴むことができた。また、南側は中世の溝が作られてしまっており分からなかった。しかし、古墳は左右対称なので中心から折り紙のように折ると、反対側の堀を特定することができるので、古地図の区画をもとにした。昔の区画は線を意識して作られているので、立ち上がりをもとにしている部分がある。

総社二子山古墳周辺地積図

『総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅱ』より



綿貫観音山古墳の墳丘の設計・企画

『東アジアに翔る上毛野の首長』より

調査すると、赤い線がある部分が立ち上がりであることが分かり、それを繋げていくと堀の一部の大きさが分かった。

墳丘形状の比較

（左：綿貫観音山古墳　右：総社二子山古墳）

『総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅱ』より

丸くなっている後円部の堀の部分については、中心部にコンパスを入れて円を描くと、位置関係が分かった。このように、区画や図形を用いて考えていくと、赤い線のような堀が浮かび上がった。この堀の位置は、綿貫観音山古墳と一致し、綿貫観音山古墳は二重の周堀があることから、総社二子山古墳も二重の周堀があることが予想される。

墳丘に関しては、後年の開発で改変されてしまったので、現在は綿貫観音山古墳とは数値が違うが、堀の間隔から、形が同じことが分かる。そして2つの古墳を重ね合わせて比べてみると、くびれ部分の一致、前方部墳丘の形なども一致し、構築時は綿貫観音山古墳と同じ大きさ・形だということが分かった。

(3)1つの古墳に2つの石室？　不思議な石室の謎

総社二子山古墳には、造りの異なる2つの石室が前方部と後円部に1つずつあり、後円部の石室については、綿貫観音山古墳との共通性が指摘されている。

古墳名	石室規模（m）				壁体構成
	全長	玄室長	玄室巾	玄室高	
総社二子山古墳　後円部	9.4	6.88	3.4	2.4	角閃石安山岩削石積
総社二子山古墳　前方部	8.76	4.27	2.17	2.06	自然石乱石積
綿貫観音山古墳	12.65	8.14	3.95	2.2	角閃石安山岩削石積

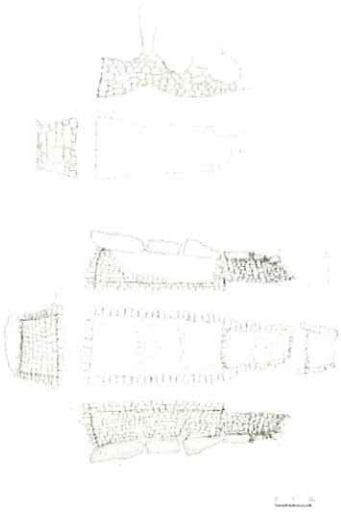
綿貫観音山古墳の石室

総社二子山古墳と綿貫観音山古墳の後円部に築かれた石室は、榛名山から噴出した角閃石安山岩を上下左右と表面の5面を切削し、ブロック型に加工したものを基本形にしている。同じ石材加工で横穴式石室を構築した古墳の分布は、利根川流域の群馬県南部や埼玉県北部の地域などにも見られ、綿貫観音山古墳を造営した氏族が管掌する専業の石工集団の存在が考えられる。

また、綿貫観音山古墳は現在わかっている群馬県の横穴式石室のなかでは最大規模であり、玄室床面プランは欽明

天皇陵とも言われる奈良県の五条野丸山古墳の玄室と同形のプランであることが指摘されている。

総社二子山古墳の後円部の石室は、わずかに小さくなるものの、大型の玄室に短い羨道がつく平面プランが共通しており、石材加工も含め、当時の最先端の技術で作られた石室であることがわかる。この構造は群馬県地域の伝統を一新して作られたもので、他の地域だとあまり見られない。同じ構造をしている綿貫観音山古墳と総社二子山古墳の後円部は、設計図を共有して同じ集団が石室を作ることに携わっていたと考えられる。



総社二子山古墳後円部石室と綿貫観音山古墳石室

『総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅱ』より

総社二子山古墳前方部の石室

一方、総社二子山古墳の前方部石室は、後円部に比べやや小型で、平面プランも羨道が長くなるなど異なっている。また、後円部の石材と異なり大ぶりな自然石を利用して構築されているが、これは後続する愛宕山古墳へと引き継がれている。この前方部石室には、綿貫観音山古墳との共通性は感じられないが、副葬品として同じ作りの頭椎大刀が、石室の異なる前方部から出土していることは、不思議な点である。

総社二子山古墳の2つ石室の作られた時期やそれぞれの埋葬者の関係性については、不明であるが、後円部石室→前方部石室の順であると考えられている。どのように後から構築する石室を納めたのかは、墳丘の掘削調査ができれば明らかになるかもしれない。

⑷稀少な大刀？共通する副葬品「頭椎大刀（かぶつちのたち）」の謎

2つの古墳に共通する副葬品として注目されるのは、両古墳から出土した豪華な金銀装頭椎大刀である。

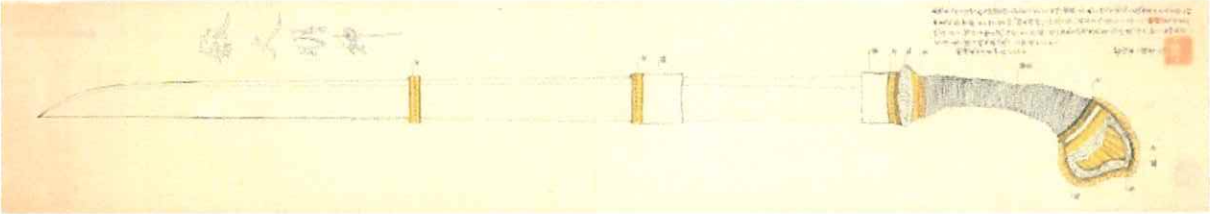
綿貫観音山古墳出土

金銀装頭椎大刀　『綿貫観音山古墳ガイドブック』より

全長117cmに復元される非常に大型の大刀。倭の伝統技法と朝鮮半島の刀作りの技術の融合が

見られる。群馬県立歴史博物館保管。

総社二子山古墳(前方部石室)出土



総社二子山古墳出土刀剣実測図　『総社古墳群総括報告書』より

文政2年(1819 年)出土。全長141cmとされる。現在は所在不明だが、大正10年に前橋市立図書館職員が模写した詳細な絵図が残されており、絵図を基に復元された大刀を前橋市総社歴史資料館で見ることができる。

頭椎大刀は、柄の先端、柄頭が握りこぶしのようにふくらんだ形の大刀の名称であり、古墳時代後期につくられた日本固有の装飾付大刀で、儀仗用と考えられている。全国で約 90 例出土し、東日本、とくに群馬県、千葉県、静岡県に多く分布することから、物部氏とのつながりが指摘されている。

頭椎大刀は、伝統的な倭系の大刀を祖型とし、朝鮮半島系の大刀のデザイン、金属加工技術を融合することにより生み出されたとされるが、成立時期や型式の特徴から、2つの古墳から出土した頭椎大刀は、最古段階に位置づけられ、同じ工房で作られた物と推定されている。全国で同様の型式の大刀出土例は、他に1例(愛知県神明社古墳)のみであり、非常に稀少なものであるだけではなく、その後流行する金銅板の装具で飾られた頭椎大刀の成立する一段階前の頭椎大刀であり、最上位層だけが所持することを許された大刀であったと考えられる。

古墳の副葬品として装飾付大刀は、ヤマト政権や中央豪族との結びつきを示すものであることから、共通する頭椎大刀が出土することは大きな意味を持つことが分かる。

柄頭の比較

『歴史発見！前橋フィールドミュージアム』より

総社二子山古墳出土
頭椎大刀復元品

総社二子山古墳出土
頭椎大刀絵図

綿貫観音山古墳出土
頭椎大刀

4. 考察

これまで、2つの古墳の概要と共通点について調べてきたが、両古墳の関係性を探る上で、まずそれぞれの被葬者の人物像を考えてみたい。未盗掘の古墳から豊富な副葬品が出土した綿貫観音山古墳の被葬者は、様々な手がかりがありイメージしやすい。豪華で国際色豊かな副葬品からは朝鮮半島や中国に直接由来するものがある。これは6世紀の日本の国際情勢を考えると、当時、中央政権とも強い繋がりを持ち、外交政策に積極的に関わり、多くの武具の出土から軍事的行動にも関わっていた可能性がある、上毛野の有力な首長が浮かび上がってくる。豊かな経済力を持ち、積極的に新しい物や技術を取り入れ、国際情勢にも通じた人物ではなかっただろうか。

次に総社二子山古墳の被葬者の人物像であるが、まず、2つの石室の関係について考えてみたい。綿貫観音山古墳と同様に設計されたとすれば、当初は同じ造りの後円部の石室が先に造られていたと考えられる。こちらの被葬者は、綿貫観音山古墳の被葬者と同世代で、古墳の設計図や技術集団を共有するほど親交が深かったのではないかと思う。また、この人物は総社二子山古墳から出土した頭椎大刀を拝領した本人だと思う。なぜなら、この大刀は大量生産されたものではなく、物部氏の持つ工房で作られたとすると、一族を率いた物部守屋が蘇我馬子や聖徳太子らとの戦いで討たれたのは587年であり、その後の頭椎大刀は双龍環頭大刀と飾り金具の一部が共通化されるため、この造りの大刀は、限られた時期に作られたものだからだ。

そして、前方部の石室の埋葬者であるが、頭椎大刀を継承した後継者(おそらく息子)ではないかと思う。こちらは何らかの事情で、新たな古墳を造ることができなかったと思われる。若くして亡くなったため、新たな古墳を造成する期間がなかった可能性もある。もう一つ考えられる理由は、6世紀末期から7世紀初頭は、東国における国造制の成立により、前方後円墳の造成が終了する時期であり、この総社古墳群の首長が上毛野国造に就任したとされている。初代国造は、就任時にはすでに寿墓として前方後円墳を築造していたと思われ、先に触れた後円部の人物が初代だったと考えると、その後の方墳に移行する狭間の期間で、次の古墳の準備が充分に行えず、やむを得ず既にある前方後円墳に石室を新たに増設することで対応し、身分を表す証として、継承した頭椎大刀を一緒に葬ったのではないかと考えられる。

綿貫観音山古墳と総社二子山古墳は、6世紀後半につくられた前方後円墳の中でも、最大規模の古墳であり、その被葬者の勢力は上毛野における2トップとして活躍していたのではないかと思う。そして、隣り合う位置でありながら、ライバルとしての敵対心は感じられず、友情が伝わってくる。また、いずれ劣らぬ活躍により中央政権から頭椎大刀を授かる場面では、同じ場に同席していたのではないかと思う。そして、総社二子山古墳から出土した大刀の方がわずかに長いことから、その後の国造就任への動きを予測することができる。

気軽に調べはじめた2つの古墳であったが、現地調査をしたり、わずかに残る共通の手がかりから、古代の人物の人柄や関係を推理することは、とても楽しかった。総社二子山古墳の後円部石室は、崩落しており近づくことができなかったが、今後の修復及び2つの石室や墳丘の再調査が行われることに期待したい。

5. 参考文献

『総社古墳群総括報告書』 前橋市教育委員会
『総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅱ』 前橋市教育委員会
『群馬県立歴史博物館　綿貫観音山古墳ガイドブック』 群馬県立歴史博物館
『東アジアに翔る上毛野の首長　綿貫観音山古墳』 大塚初重・梅澤重昭
『古代刀剣と国家形成』 豊島直博
『刀剣　武器から読み解く古代社会』 古代歴史文化協議会
『古墳時代毛野の実像』 右島和夫・若狭徹・内山敏行
『古代の東国１　前方後円墳と東国社会』 若狭徹
『東国首長の地域経営と装飾付大刀の意義』 若狭徹
『群馬の古墳物語〈上巻〉』 右島和夫
『群馬の古墳物語〈下巻〉』 右島和夫
『古墳を築く』 一瀬和夫
『前方後円墳編成東北・関東編』 近藤義朗
『東国文化副読本～古代群馬を探検しよう～』 群馬県
『東国の雄　総社古墳群』 前橋市教育委員会
『榛名山東南麓の古墳』 前橋市教育委員会
『前橋市フィールドミュージアム』 前橋市教育委員会　https://maebashi-bunkazai.jp